

『マンデヴィルの旅行記』と「装置」としての語り手

大 沼 由 布

1. はじめに：マンデヴィルと旅行記

『マンデヴィルの旅行記』(*Mandeville's Travels*)は、1356年頃にフランス語で書かれ、その後英語を含むヨーロッパ各国語に訳された中世当時のベストセラーの一つである。英語版は特に良く知られ、六つのバージョンが存在している。この作品は、作品自体の中では、サー・ジョン・マンデヴィル (Sir John Mandeville) と名乗るイングランドの騎士が、東洋の様々な国へ旅した経験に基づいて書き下ろした書物、と規定されている。しかし、この主張をそのまま受け取る事ができないのが、この作品の特徴と複雑さと言える。

とはいえ、半ば当然の事ながら、この記述は当初は信じられていた。例えば、ローマへの巡礼をもとに『巡礼の慰め』(*The Solace of Pilgrims*)を記したジョン・キャプグレーヴ (John Capgrave, 1393-1464) は、『巡礼の慰め』の冒頭で、マンデヴィルを旅行記の作者として高く評価している (Mills 1)。さらに、1492年にドイツのニュルンベルク (Nuremberg) で現存する世界最古の地球儀を作ったマルティン・ベハイム (Martin Behaim) も、プトレマイオスやマルコ・ポーロなどの記述と共に、『マンデヴィルの旅行記』を参照している (Moseley 89-90)。このように、基本的に2世紀ほどの間は、マンデヴィルは偉大な旅行者と信じられていた。しかし、16世紀の中頃になると、その記述に疑いがもたれ始め、結局19世紀後半には、『マンデヴィルの旅行記』は先行文献の切り貼りにより作成されたものであると明らかになった。

さらに、「作者」のマンデヴィルという人物についても、作品の内容が他

人の著作からの寄せ集めと分かった以上、そこに語られている通りの人物でない事は明白となったが、作品中での紹介以外の伝記的情報が伝わっていないため、実在の人物なのか疑いがもたれている。この問題については、未だに結論は出ていないものの、近年ではジョン・マンデヴィルは『マンデヴィルの旅行記』の語り手と捉え、作者とは分けて考える方向にある。

数世紀に渡り本当の東洋旅行者と信じられてきた、ジョン・マンデヴィルという存在は、『マンデヴィルの旅行記』特有の複雑さを生み出している。西洋では、古代から中世にかけて東洋には数々の驚異が存在すると考えられてきたが、それらの驚異を実際に目撃し、西洋の読者へと伝える媒介として、マンデヴィルの果たした役割は大きい。ここでは、『マンデヴィルの旅行記』という作品の中の巧妙な「装置」である語り手のマンデヴィルが、どのように形作られ、どのような役割を果たしたのか、「驚異」の記述という視点から考えてみたい。

2. 語り手マンデヴィルの人物像¹

『マンデヴィルの旅行記』の冒頭及び最終部分には、語り手が自分自身について紹介する箇所がある。なかでも冒頭部は、通常校訂版ではプロローグとして独立しており、作品の執筆動機や自己紹介が行われている。そこで、マンデヴィルは自身について以下のように述べる。

I Iohn Maundevylle knyght, alle be it I be not worthi, that was born in Englonde in the town of Seynt Albones, and passed the see in the yeer of oure lord Ihesu Crist m.ccc. and xxii. in the day of Seynt Michelle; and hiderto haue ben longe tyme ouer the see and haue seyn and gon thorgh manye dyuerse londes and many prouynces and kyngdomes and iles. (Seymour, *Mandeville's Travels* 3)²

出身地がイングランドのセント・オールバンズ (St Albans) である事や、1322年に旅に出た事等の情報は載っているが、注目すべきは、旅の目的が明

示されていない事である。この直後に実際マンデヴィルが訪れた土地の名前が10以上も列挙されるにも関わらず、何をするためにそこを訪れたかは全く書かれていない。14世紀当時、東洋への旅はかなりの危険を伴うものであったため、必ず何らかの目的があったはずであるが、それをあえて著述しない、という事が、マンデヴィルという語り手を考える上で、重要な点の一つとなる。

ただし、旅の全てではないにせよ、断片的に、どのような目的を持っていたかが読み取れるような記述は存在している。

[S]pecyally for hem that wille and are in purpos for to visite the holy citee of Ierusalem and the holy places tha are thereabout. And I schalle telle the weye that thei schulle holden thider, for I haue often tymes passed and ryden that way with gode companye of many lordes, God be thonked. (3; 下線は筆者による)

これはその一例で、エルサレムとその周辺へ行こうと考えている者、つまり、聖地巡礼を考えている者のために、道順等を紹介する事が、作品の執筆動機の一つだと述べている部分である。その際、下線部にあるように、自分は多くの人と何度もエルサレムへ行った、と述べており、ここから、マンデヴィルは巡礼をするために旅に出た、という可能性が考えられる。この可能性は、作品の終わり近く、マンデヴィルが自分のために祈りを捧げてくれた読者には、自分の“alle the gode pilgrimages” (229) 及び善行で積んだ功德を分け与えよう、と述べている事からも強められる。これにより、マンデヴィルは一度ならず聖地巡礼を行った、という設定である事が分かる。それを裏付けるように、物語の本文でも、エルサレムについては特に詳しく紹介され、実際マンデヴィルが聖地で経験した事等も書かれている。

しかし、旅の目的は巡礼だけとは言えない。マンデヴィルは前述のように10を超える様々な地域を訪れており、インドや大ハーンの国等、エルサレムよりさらに東の土地へも行き、キリスト教の巡礼とは無縁の土地も含まれ

ている。さらに、旅の長さも関係してくる。マンデヴィルが故郷を出発したのは1322年だったが、作品の終わりの部分では、この本は、帰国した後の“the yeer of grace a m.ccc. and lvi. in the xxxiiii. yeer that I departede from oure contrees” (229)、つまり故郷を出てから34年目になる1356年に書いた、と述べている。このことから、マンデヴィルは30年ほど故郷に帰っていなかった事がうかがえ、巡礼だけにしては、長過ぎる海外逗留と言える。

巡礼以外に考えられる旅の目的として、マンデヴィルが自身について述べる以下のような文がある。

I Iohn Maundevylle knyght . . . haue ben in many a fulle gode honourable companye and at many a faire dede of armes, alle be it that I dide none myself for myn vnble insuffisance. (229)

ここにあるように、マンデヴィルは、多くの戦いの場に居合わせた、と設定されている。力不足のため実際戦ってはいない、ともあるが、騎士であるマンデヴィルにとって、旅の一部に戦闘が含まれるのは自然とも言える。戦闘については、さらに他の箇所でも、エジプトのスルタンについて述べる際に、“I duelled with him as soudyour in his werres a gret while ayen the Bedoynes” (24) とし、マンデヴィルはスルタンに兵士として仕え、ベドウィン族との戦闘中に何年も一緒にいと主張している。さらには、その直後に、スルタンに非常に重用され、キリスト教を捨てさえすれば、娘婿になれたほどだった、とも書いている。ここからは、傭兵のような働きをしていた事がうかがえるが、マンデヴィルは、聖地をキリスト教徒の手に奪還すべき、と作品の冒頭部分で強く訴えているため、自ら行動を起こそうと旅に出た、とも考えられる。³

ただその一方で、『マンデヴィルの旅行記』には、戦いの場面が一切含まれていない。これについては、騎士である事によって、東洋の宮廷に深く入り込み、東洋の君主に重用されて長い間滞在する、という仕組みを作りつつ、大して強い騎士ではないため実際の戦いの場面を語るほどでもない、という微妙なバランスを取っていると考えられる。つまり、目撃者としての権威付

けをしつつ、「勇敢な騎士」というある一定の方向からの記述だけに縛られないようにするという、物語の構造上巧妙な仕掛けを作り出しているのである。例えば、マンデヴィルは元朝の大ハーンの宮廷についても非常に詳しく述べており、スルタンの宮廷滞在に加え、大ハーンの宮廷にも兵士として長期滞在したという設定である（158）。しかし、マンデヴィルと大ハーンとの関わりは詳述されず、大ハーンの国の文化や風俗が詳しく記録される。このように、マンデヴィルの記述は、戦いを軸に話が進む事はなく、旅先で遭遇した様々な風習や出来事等を書く事が主眼になっている。

マンデヴィル自身の自己紹介からうかがえる旅の目的は、巡礼と戦い、という以上の二点である。それに加え、具体的な物語の内容を見ると、例えば、良いバルサム香油や良いダイヤモンドを見分ける方法について詳しく記述する等(36-37, 117-18), 商業的な側面もある。さらに、ダイヤモンドについては、そのでき方、種類、効能等も説明し、短いながらも具体的な内容を含んでおり、『マンデヴィルの旅行記』に百科事典的性格も付け加えている。⁴

このように、マンデヴィルという人物は、旅の目的も曖昧で、その記述は非常に多岐に渡る。生まれ故郷等の具体的な情報が書かれている一方で、どういう人物かという点においては、非常に曖昧な造形になっており、ある程度何者にもなり得るような、弾力性を持たせた設定になっている。そして、この柔軟さにより、一つの立場に縛られず、単に観察し、記録する者として機能し、様々なタイプの記述を残している。例えば、エルサレムについて書く時は巡礼という立場になり、東洋の宮廷について書く時は騎士という立場になり、といった具合に、場に応じて立場や視点を変えて記述する事が可能となる。そしてそれにより、実際記述を書いている人物は、マンデヴィルという語り手を通して、様々な原典にある記述を使えたと考えられる。こうして、旅の目的も曖昧で、実在の人物のように見えるもののは実はそうではないマンデヴィルという人物は、『マンデヴィルの旅行記』の中で、雑多な記述を一つにまとめる役割を果たした。様々な立場の人間が書いた種々の記述

を原典から引き、作品として一つにまとめて詰め込む事ができたのは、目撃者・経験者であるマンデヴィルの人物像がはっきりしていなかったからだったと言えよう。

3. 語り手と驚異の権威付け

このように注意深く作られたマンデヴィルという旅人は、その記述の中でたびたび、自分の目を見た、自分は経験した、と強く主張する。しかし、その役割は、物語の前半と後半とで微妙に異なっている。

マンデヴィルは、プロローグの部分で、エルサレムがイスラム教徒の手に落ち、交流が途絶え、今では多くの人が、せめてエルサレムについての話だけでも聞いて慰めを得たい、と考えているので、及ばずながら自分がその役を務めよう、と述べており(3)、作品の第一の執筆動機は、聖地エルサレムの様子を語る、という事になっている。しかし続けて、自分が訪れた国々の名前を挙げ、そういった土地についても、後で詳しく話そう、と予告している。実際、全34章のうち、約半分にあたる第16章の始めで、もう聖地については話したので、今度は聖地より向こうの事、“the marches and iles and dyurse bestes and of dyurse folk beyond these marches” (105) について話す事にする、と明言している。この事から、『マンデヴィルの旅行記』という作品は、前半が聖地巡礼についての手引き、後半が東洋の生き物や人間について書いた驚異の書、という、二つの役割をもっていると解釈できる (Deluz 32; Zacher 131, 50, 54)。

物語の前半部分は、エルサレムまでの道程であるため、巡礼の際考えられる様々なルートや、聖書関連の場所、それぞれの都市の間の距離等、同時代の実際の聖地巡礼の手引きにあるような、具体的な情報が書かれている。このような文脈では、東洋へ向かう道とはいえ、「驚異」として語られるものはある程度限られている。前半部分の「驚異」として目立ったものは、エジプトと関連して紹介された半人半獣の生物とフェニックスであろう。

一つ目の、エジプトの隠者が出会った半人半獣の怪物は、以下のように描写される。

And this monstre that mette with this holy heremyte was as it hadde ben a man that hadde ii. hornes trenchant on his forhede, and he hadde a body lyk a man vnto the navele, and benethe he hadde the body lych a goot. And the heremyte asked him what he was, and the monstre answerde him and seyde he was a dedly creature such as God hadde formed . . . and besoughte the heremyte that he wolde preye God for him, the whiche that cam from Heuene for to sauene alle mankynde, and was born of a mayden, and suffred passioun and deth, as wee wel knowen, be whom wee lyuen and ben. And yit is the hede with the ii. hornes of that monstre at Alisandre for a merueyle. (33-34; 下線は筆者による)

これは、最後に“merueyle”とは銘打たれているが、怪物が神の被造物として作られた、という事や、自分のために全人類を救う神へ祈って欲しいと願う点、つまり怪物が魂の救済を欲している、という事から、聖アウグスティヌスが『神の国』第16章で取り上げたような、怪物種族の救済の問題と深く関わっていると思われる。今でもアレクサンドリアにその頭部が残っており、“merueyle”になっているとあるものの、自然の驚異というより、神の意図を示すために作られた、神の奇跡と分類できるのではないだろうか。さらに付け加えるならば、ここで引用した版や、原典のフランス語版 (Mandeville 150) では、“merueyle,” “merveille”などと表記されているが、別の英語版では、“miracle”と書かれているものもあり (Seymour, Egerton 26)、奇跡との結び付きの深さを感じさせる。

さらに、この後すぐ続けて、もう一つの驚異であるフェニックスが登場する。これはエジプトのヘリオポリス (Heliopolis) という町の神殿に、フェニックスが500年ごとにやってきて、自らを燃やし、再生する、という話を紹介したものである。

And at the v.^c yeres ende the prestes arrayen here awtere honestly and putten therevpon spices and sulphur vif and other things that wolen brennen lightly, and than the brid Fenix cometh and brenneth himself to askes. And the first day next after men fynden in the askes a worm; and the seconde day next after men fynden a brid quyk and parfyt; and the thridde day next after he fleeth his wey. And so there is no mo briddes of that kynde in alle the world but it alone, and treuly that is a gret myracle of God. And men may wel lykne that bryd vnto God because that there nys no god but on, and also that oure lord aroos from deth to lyue the thridde day. (34; 下線は筆者による)

下線部に見られるように、こちらも、神の偉大な奇跡である、という紹介のされ方で、中世当時よく知られていた、フェニックスは死んでから三日の後によみがえる、というキリストの復活になぞらえた寓意的解釈が施されている。

この他にも、命の炎と連動したランプ(44)や、キリストが処刑された時独りで枯れたという伝説の木(49-50)など、細々とした驚異は紹介されるが、それらも含めた物語前半の驚異の特徴は、奇跡、あるいは奇跡に近い形の驚異として紹介されるものが多い事だと言えよう。これは、『マンデヴィルの旅行記』の前半部分は、巡礼の手引き、という機能を持つため、ここでは純粹な驚きというより、宗教的な畏怖と結び付けた方が文脈にはふさわしいからだと考えられる。

さらに、見逃してはならないのが、基本的に、この部分で紹介される不思議な出来事は、マンデヴィルが自分で経験した話ではなく、聞いた話として書いている事である。出来事が起こった時代がマンデヴィルの時代より前である、という問題があるにせよ、マンデヴィルは、ここでは、驚異の目撃者ではなく、伝達者としての役割に徹している。前半の巡礼記の部分では、各地に古くから伝わる話として書き留められたものの中に、怪物や竜等も登場するが、実際それらの驚異をマンデヴィルが体験した、という状況は、聖遺

物を見たり手に入れたりした、という話を除いては、ほぼ見られない。驚きの感情と深く結び付く、驚異らしさを前面に出した驚異は少なく、さらに、驚異らしきものが登場しても、マンデヴィル自身が経験するというよりは、伝聞した、という形になっている。この点が、驚異の記述に関しての『マンデヴィルの旅行記』の前半の特徴と言えよう。

それに対して、後半になると、東洋の驚異を紹介する事が主眼となり、様々な不可思議を真実だと説得力を持たせるためには、自分が「見た」ことを主張し、「見た」から間違いない、という、経験者としての役割が重要になってくる。それを裏付けるかのように、ここでは、前半のような伝聞も勿論あるものの、実際に自分が目撃した、という表現が目立つようになっている。顕著な例としては、これから大ハーンの国の風習について詳しく話そうという時の以下の文章がある。

[S]um men wil not trow me . . . natheles I schalle seye you a partye of him [The Great Khan] and of his folk, after that I haue seen the manere and the ordynance fulle many a tyme.

. . . . I wot wel yif ony man hath ben in tho contrees beyonde, though he haue not ben in the place where the Grete Chane duelleth, he schalle here speke of him so meche merueylouse thing that he schalle not trowe it lightly. And treuly no more did I myself til I saugh it. . . . I wille not spare — for hem that knowe not ne beleue not but that that thei seen — for to telle you . . .
.. (159; 下線は筆者による)

「見る」という言葉を三度も用い、人は見たものしか信じず、自分も大ハーンの宮廷の不思議については、実際見るまで信じられなかった等、「見る」事がいかに重要で権威があるかを力説している。

さらに、具体的にマンデヴィルが体験した大ハーンの宮廷の驚異の例として、例えば、機械仕掛けの鳥形人形がある。

And [at] grete solempne festes before the emperoures table men bryngen

grete tables of gold. And thereon ben pecokes of gold and many other maner of dyurse foules alle of gold and richely wrought and enameled. And men maken hem dauncen and syngen clappyng here wenges togydere and maken gret noyse. And whether it be by craft or be nygromancye I wot nere, but it is a gode sight to beholde and a fair, and it is gret meruayle how it may be. (157;

[]は原書、下線は筆者による)

ここで紹介されているのは、宮廷の宴席の娯楽である機械仕掛けの装置と考えられるが、どういうものか説明した後、最後の下線部分で、マンデヴィルの実体験に基づく言葉として、その仕組みが全く分からず、見て楽しめる驚異である、とある。さらにこの後、マンデヴィルは、この技術を学ぼうと技術者に頼み込んだものの、一子相伝の技にすると神に誓っている、と断られた、と続けており、この驚異の神秘性をさらに強める共に、自身の反応を記録する事により、驚異の実在性を高めている。このように、体験者としてそこに在る事で、遠い国の不思議な出来事を、読者が想像しやすくなるよう橋渡しをするのが、語り手マンデヴィルの役割と言える。

さらに、『マンデヴィルの旅行記』の驚異の特徴の一つとして、古典時代から受け継がれた伝統的な東洋の驚異を多く含んでいる事が挙げられる。例えば、ヘロドトスの『歴史』第3巻106節では、羊からではなく樹から、羊の毛糸よりも良質の毛糸がとれるとの記述がある。これは、一般的に綿を指すと考えられているが、後にこの記述は、樹から羊が生じる、という驚異譚へと変化し、発展して行く。⁵

『マンデヴィルの旅行記』にも勿論この話は出てくるのだが、直接の原典となった記述は、フランシスコ会士ボルデノーネのオドリコ (Odoric of Pordenone) の記述である。

Unde ut dicitur in eis nascuntur pepones valde magni, qui quando sunt maturi ipsi aperiuntur, et intus invenitur una bestiola, ad modum unius agni parvi. Unde ipsi illos pepones habent et illas carniculas que sunt ibi.

Et quamquam istud forte incredibile videatur, tamen ista possunt esse vera, sicut verum est quod in Ibernica sunt arbores facientes aves. (482-83)
そこからこのように言われている。ここ（コーカサス山脈）では、非常に大きいスイカが産出される。熟したら独りでに割れ、内側には小さな羊の様子をした小さな動物がいる。そこからは、スイカと肉とがとれ、両方ともがそこにある。信じられないと思うかもしれないが、本当なのだ。アイルランドには、鳥を産出する樹があるというのが真実なのだから。（筆者による訳）

このように、ここでは、完全に木の実から羊に似た動物が生じる事になっており、この驚異の権威付けとして、鳥を生じる樹という西洋にある似た話が挙げられている。

これを受けたマンデヴィルの記述は以下のようにになっている。

And there groweth a maner of fruyt as though it weren gowrdes. And whan thei ben ripe, men kutten hem ato and men fynden withinne a lytylle best in flesch, in bon, and blode as though it were a lytille lomb withouten wolle. And men eten bothe the frut and the best. And that is a gret merueyille. Of that frute I haue eten, alle though it were wondirfulle, but that I knowe wel that God is merueyllous in His werkes.

And natheles I tolde hem of als gret a merueyle to hem that is amonges vs, and that was of the bernakes. For I tolde hem that oure contree weren trees that baren a fruyt that becomen briddes fleeynge. And tho that fellen in the water lyuen, and thei that fallen on the erthe dyen anon, and thei ben right gode to mannes mete. And hereof had thei als gret meruaylle, that summe of hem trowed it were an impossible thing to be. (191; 下線は筆者による)

植物羊についてはほぼ共通しているが、ここではさらに、下線のように、自分はその実を食べてみた、と体験談として一人称の証言が付け加えられている。さらには、オドリコが短く言及していた、西洋の驚異である、樹から生

じる鳥の話を詳述し、東洋の驚異と同等の扱いをしている。さらに、東洋人が、西洋の樹から生まれる鳥に驚く様を記述する事により、マンデヴィルは、驚異に相対的な視点をも盛り込んでいる。⁶ 『マンデヴィルの旅行記』は随所にこのような非キリスト教世界への寛大さを見せているのが特徴と言われるが(例えば Higgins, “Imagining” 96), これも部分的には、語り手のマンデヴィルの造形が、一方向に固定されず、曖昧かつ柔軟な事から可能になっていると考えられる。

このように、『マンデヴィルの旅行記』に描かれる驚異は、古典的な驚異を受容しつつも、それに加えて、マンデヴィルが、経験者として間に立ち、より臨場感や信憑性を出すよう記述されている。

さらに、英語版『マンデヴィルの旅行記』と、イングランドで書かれたラテン語版の一写本に見られるエピソードに、『マンデヴィルの旅行記』で伝えられる驚異の性質を良く表しているものがある。

I schewed hym [the Pope] this tretys that I had made . . . ; and besoughte his holy fadirhode that my boke myghte ben examyned and corrected be avys of his wyse and discreet conseille. And oure holy fader of his special grace remytted my boke to ben examyned and preued be the avys of his seyde conseille, be the whiche my boke was preued for trewe; in so moche that thei schewed me a boke that my boke was examyned by that comprehended fulle moche more be an hundred part, be the whiche the *Mappa Mundi* was made after. (228-29; イタリアック体は原書、下線は筆者による)

これは物語のほぼ最後の部分で、旅を終えたマンデヴィルが、長期間異教徒の間にいたため、ローマ法皇に会い身を清めてもらう、というエピソードである。そして、穢れを落としてもらったマンデヴィルは、自分の書いた本を、法皇庁に所蔵されているラテン語の権威ある書物と照らし合わせ、ローマ法皇と枢機卿たちに「検閲」してもらう事とする。そして、マンデヴィルの書いた内容が、間違いなくそこにある書物の内容と一致したと誇らしく書かれ

ている。実は当時はいわゆるアヴィニオン捕囚の時期にあたり、法皇はローマでなくアヴィニオンにいたため、この記述は史実と矛盾する上、マンデヴィル自身の言によれば本を書いたのは旅を終えてからのはずであり、二重の矛盾が見られる。それにも関わらず、語り手はここでも、世界地図もそれに従って作られるような、審査に使われた本を実際自分の目で確認した（“they schewed me a boke”）、という権威付けを忘れてはいない。

『マンデヴィルの旅行記』に記述される驚異は、古典古代からの伝統に則る、ある意味非常にオーソドックスな東洋の驚異で、それに、マンデヴィルという作られた旅行者が、実際この目で見た、という実体験による権威付けを与える事により、書物と経験という二重の権威に裏付けされて成り立っているもの、と考える事ができる。また、後半の驚異の記述と、基本的に伝聞が多かった前半の奇跡の記述との違いから、『マンデヴィルの旅行記』では、純粹に驚きの感情をあおりたい時ほど「実際見た」という事を強調する傾向にある、と結論付けられる。奇跡は神の名前により権威付けができるのに対し、驚異は、マンデヴィルが目撃者、体験者として、その実在性を裏付ける、という権威が必要だからであろう。

4. まとめ

以上の事から、『マンデヴィルの旅行記』は、驚異にかかせない信憑性を付加するために、ジョン・マンデヴィルという語り手を、権威付けの装置として作成したと考えられる。ただ驚異を記述するよりも、それが誰かに体験され目撃され検証された、という形にする事により、信憑性を増すようにしたのである。それ故に、前半の巡礼記の部分よりも、後半の東洋の驚異の紹介部分で、よりその一人称の語り手としての役割は重要となっている。

歴史上高名な人物でもないマンデヴィルを、驚異の媒介者として設定し、しかも権威付けに成功した理由は、マンデヴィルが実在の人物ではないため、かえって何にも縛られる事なく自由に造形でき、様々なものを柔軟な視点を

もって記述できるようにしておけた、という点にあらう。さらには、先行する作品の記述を典拠として用いているため、読者の良く知る他の話と一致し、安心して信じる事ができたとも考えられる。さらに、マンデヴィルが驚異として伝えたものは、伝統的な東洋の驚異が多く表現も伝統的だが、そこに特徴的な相対化する視点を付加している。つまり、マンデヴィルが「見る」ことにより、権威付けと共に、新しい柔軟なものを見方を導入する事もできる、という複数の利点が見受けられる。

このように、マンデヴィルという語り手は、古代と中世、伝統と現在、巡礼と驚異、という二つのものを、うまく結び合わせる要になる存在として機能している。驚異を体験する、という権威を与えるための存在であり、実在したかどうかははっきりしない故に、特定の立場に縛られず、様々なものに驚異の権威付けができるという利点があった。それと同時に、伝統的な驚異を記したその記述によって、逆にマンデヴィルという人物が権威付けされ、偉大な旅行者として受け入れられていった、と考える事もできる。つまり、マンデヴィルが作中で果たす役割は、記述の信憑性を高めるだけでなく、記述者の信憑性をも高める、という二重の権威付けだったと言える。

*本論は、「驚異譚にみる文化交流の諸相—中東・ヨーロッパを中心に—」共同研究会（於・国立民族学博物館）で2012年5月26日に行った口頭発表に基づいており、JSPS科研費22320074の助成を受けた。

注

- 1 マンデヴィルの人物像については、Onuma, "Go to the Ant" 5-7でも扱っている。
- 2 『マンデヴィルの旅行記』の英語版には六つのバージョンがあるが、本論では、代表的なバージョンの一つ、British Library, MS Cotton Titus C. xviに残されたコットン版を主体に論じ、特に断わりのない限り『マンデヴィルの旅行記』本文への言及はSeymourによるコットン版校訂版のページ数のみを示す。なお、バージョ

- ン等の詳細については、Tzanaki 14-18; Higgins, “Mandeville” 104-111 等を参照。
- 3 さらに、マンデヴィルは、イスラム教徒の教義はキリスト教徒の教義に似ており、宣教を行えばキリスト教徒へ簡単に改宗させられるのではないか、という主張も展開している (98)。この点からも、語り手マンデヴィルが、現在の状況を変えたいと思っていた、という設定の人物である事を読み取れる。
- 4 これと関連してか、“Jehan de Mandeuille, chevalier” に帰せられるフランス語の lapidary も存在する (Evans 64-68. Cf. Wright)。
- 5 例えば Lee 46 参照 (Lee は植物羊の描写の発展について詳述している)。
- 6 この点は、Onuma, “Through the Eyes of Travellers” で詳しく取り上げられている。

引用文献

<一次資料>

- Mandeville, Jean de. *Le Livre des merveilles du monde*. Ed. Christiane Deluz. Paris: CNRS, 2000. Print. Sources d’Hist. Médiévale: Publiées par l’Inst. de Recherche et d’Hist. des Textes 31.
- Mills, C. A., ed. *Ye Solace of Pilgrimes: A Description of Rome, circa A.D. 1450, by John Capgrave, an Austin Friar of King’s Lynn*. Introd. H. M. Bannister. London: Frowde, 1911. New York: AMS, [1980]. Print.
- Odoricus Portu Naonis [Odoric of Pordenone]. “Relatio.” *Sinica Franciscana*. Vol. 1: *Itinera et relationes Fratrum Minorum saeculi XIII et XIV*. Ed. Anastasius van den Wyngaert. Quaracchi, Florence: Collegium S. Bonaventurae, 1929. 381-495. Print.
- Seymour, M. C., ed. *Mandeville’s Travels*. Oxford: Clarendon, 1967. Print.
- , ed. *The Egerton Version of Mandeville’s Travels*. Oxford: Oxford UP, 2010. Print. EETS OS 336.

<二次資料>

- Deluz, Christiane. *Le Livre de Jehan de Mandeville: une “géographie” au XIV^e siècle*. Louvain-la-Neuve: Inst. d’Études Médiévales de l’U Catholique de Louvain, 1988. Print. U Catholique de Louvain Pub. de l’Inst. d’Études Médiévales: Textes, Études, Congrès 8.
- Evans, Joan. *Magical Jewels of the Middle Ages and the Renaissance Particularly in England*. Oxford: Clarendon, 1922. Print.
- Higgins, Iain. “Imagining Christendom from Jerusalem to Paradise: Asia in *Mandeville’s Travels*.” *Discovering New Worlds: Essays on Medieval Exploration and Imagination*. Ed. Scott D. Westrem. New York: Garland, 1991. 91-114. Print. Garland Medieval Casebooks 2:

- Garland Reference Lib. of the Humanities 1436.
- . “Mandeville.” *A Companion to Middle English Prose*. Ed. A. S. G. Edwards. Cambridge: Brewer, 2004. 99-116. Print.
- Lee, Henry. *The Vegetable Lamb of Tartary: A Curious Fable of the Cotton Plant; to Which Is Added a Sketch of the History of Cotton and the Cotton Trade*. London: Sampson Low, 1887. Print.
- Moseley, C. W. R. D. “Behaim’s Globe and ‘Mandeville’s Travels.’” *Imago Mundi* 33 (1981): 89-91. Print.
- Onuma, Yu. “‘Go to the Ant’: Appropriations of the Classical Tradition in *Mandeville’s Travels*.” *Studies in English Literature* English number 47 (2006): 1-22. Print.
- . “Through the Eyes of Travellers: Classical and Medieval Views of Exotic Marvels.” *Studies in Medieval English Language and Literature* 27 (2012): 59-78. Print.
- Tzanaki, Rosemary. *Mandeville’s Medieval Audiences: A Study on the Reception of the Book of Sir John Mandeville (1371-1550)*. Aldershot: Ashgate, 2003. Print.
- Wright, Thomas. “On Antiquarian Excavations and Researches in the Middle Ages.” *Archaeologia* 30 (1844): 438-57. Print.
- Zacher, Christian K. *Curiosity and Pilgrimage: The Literature of Discovery in Fourteenth-Century England*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1976. Print.

Synopsis

Mandeville's Travels and the Role of the Narrator

Yu Onuma

Mandeville's Travels (c. 1356) purports to be a travel narrative by Sir John Mandeville, a knight. This claim was believed at first, but nowadays we know that his “narrative” is a patchwork of older narratives, and even the existence of John Mandeville himself is doubtful. Nonetheless, Mandeville, as narrator, plays a peculiar and important role in the tale, especially as a vehicle to convey Eastern marvels to Western readers.

In the Prologue, the narrator introduces himself and explains his motives for writing the tale. He tells the reader where he is from and how long he stayed overseas. However, he says nothing about the purpose of his travels, which unfolded over more than thirty years. Evidence in the narrative itself permits us to deduce that among his purposes were pilgrimages. In addition, he claims to have been present at a number of battles in which he did not himself take part, though no battles are, in fact, depicted in *Mandeville's Travels*. Still, Mandeville seems to have gone deep inside foreign courts. His stance allows for two things: dwelling in foreign courts, to the business of which he presents himself as an eyewitness; and avoiding biases such as we associate with the figure of the brave warrior. Moreover, descriptions of many sorts, from the commercial to the encyclopaedic, fill the pages of *Mandeville's Travels*. Such uncommon variety of matter and theme is made possible by the ambiguous and flexible figure the narrator adopts.

Furthermore, the role of the narrator is different in the first and the second

parts of the narrative. In the first half, he tends to report hearsay, and the supernatural events he records are mainly divine miracles. On the other hand, in the latter half of the story, his role as an eyewitness grows more important. Numerous Eastern marvels, inherited from classical texts, appear in this part, and Mandeville, in his role as narrator, enhances the reality of the marvels by observing and/or experiencing them firsthand. Thus, the authorisation of marvels, here, is manifold, deriving, as it does, both from books and from experience. Moreover, it can be said that while miracles must be attested to by God, marvels, supposedly connected directly to pure surprise, are authorised by eyewitness accounts.

Consequently, the narrator in *Mandeville's Travels* is a flexible medium for authorisation, especially in the case of Eastern marvels. This is possible precisely because he is a fictional figure. He also brought about a new way of looking at traditional marvels. Sir John Mandeville—as a character—functions to connect various factors together into a single narrative. But at the same time the very fact that he himself “saw” traditional marvels enhanced his authority as a traveller. In short, this system works in a mutually reinforcing way: it “authorises” not only what is narrated but also the agent doing the narrating.